

沖縄芸能と太鼓(序)

大 城 學
(沖縄県立博物館)

Introduction to the Drums of the Okinawa Performing Arts

Manabu OSHIRO
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

沖縄芸能(広く本土の芸能も含めて)の打楽器のうちで、もっともよく使用され、かつ重要なものが<太鼓>である。古文献には<つつみ(鼓)>とあるが、それらはどういう形状をしていたのか、どのようにして鳴らしたのか(桴を使用したのか、あるいは掌<指を含む>で打ち鳴らしたのか)充分わかっていない。古代日本では、形状や材質は問わず打楽器の総称を<鼓>といていたようである。

<鼓>や<太鼓>は、リズムを刻むのに用いられる打楽器としてだけでなく、古文献や芸能をみると、呪的な要素がある。それらをとおして、<鼓>や<太鼓>の実態をみてみたい。

[一]

はじめに、古文献にあらわれた<鼓><太鼓>の用例をみてみよう。

(1)『李朝実録』(1392~1546)

ア) 世祖 8 (1463) 年の記事

- 一、迎詔勅、中原の詔勅及び我が国の書契国に到り、船泊して初面のとき、旗纛・蓋等の物を以て儀仗と為し、又軍士甲冑を具して、出で迎へ、詔勅・書契を舉轎に安じ、傍より鼓鉦を撃ち、太平簫を吹きて、王宮に迎へ入る。

「中国からの詔勅や朝鮮からの文書が琉球に着き、それをかごに乗せ、その傍から鼓やドラを打ち鳴らして、太平簫を吹いて王宮に迎え入れられる」ということである。港から王宮までの行列で、かごの側から鼓を打っていたというが、どういう形状であったのか、どのような打ち方をしていたのかはわからない。旗をたて、かごをかついでの行列は、古くは例えば、冊封使行列の絵図を現在見ることができるが、上述の記録は、あるいは写真(1)のような様子であったのかも知れない。



写真(1) 「冊封使行列図」(沖縄県立博物館所蔵)

イ) 成宗 10 (1479) 年の記録

一、七月十五日は、諸寺刹幢蓋を造る。……居民、男子の少壮官を選び、或は黄金の仮面を著し、笛を吹き鼓を打ちて王宮に詣る。……鼓打も亦我が国と同じ。

7月15日に宮廷で行事があったようである。「諸寺では旗を立てる柱やはた、かさをつくる。元気のいい若者を選び、黄金の仮面を被り、笛を吹き、太鼓を打って宮廷に詣る。鼓の形状は朝鮮のそれと同じである」ということである。琉球王城で使っていた鼓は、朝鮮の鼓と同じ形状のものだというが、具体的にどういうものなのかはわからない。また、打ち方もわからない。ただ、このころは琉球王城でも鼓を使用していたことだけは明らかである。

(2) 『中山伝信録』(1721年)

ウ) 中秋宴の記録

王府の庭中、北宮滴水の前に、木台方五六丈なるを造り……次に楽工十四人有り。

……三絃二、提琴一、……笛一、小鑼一、鼓二、場に登り、……。

「王城の庭の北殿滴水の前に、木材で四方5、6丈の舞台をつくり、そこで芸能が披露される。楽工14人がいて、三絃2人、提琴1人、笛1人、小鑼1人、鼓2人が舞台に登って云々」といっている。ここでも鼓の形状や打ち方については書いていない。

エ) 重陽宴の記録

竜潭は、王宮の北、円覚寺の西に在り。……重陽宴に、竜舟の戯を為す。……竜舟は三、式は福州に見る所と略ぼ同じ。……每舟中央に鼓を設け、……船首の一人は鑼を撃ち、鼓と相応ず。

重陽宴では、竜潭で舟遊びがあったようである。舟は3艘で、それぞれの舟の中央に鼓を設け、船首の1人がドラを打つとそれに応じて鼓を打っていたという。舟の長さは3丈(約9m)で、槳(乗組み人員)は二十八人とも書いてあるから、かなり大きな舟であったと思われる。現在の舟漕ぎの様子から察すると、鼓は桴で打っていたのであろう。

(3)『琉球聘使略記』(1833年)

オ)「於 宮中奏楽次第」

前		プログラム前半の第一奏楽で「萬年春」
第一奏楽	萬年春	という曲を、唄吟以下の楽器で演奏したというものである。鼓にはくウ>とルビが
唄吟	城間筑登之親雲上	振られている。第二奏楽「賀聖明」、第三
笛	譜久村里之子	奏楽「楽清朝」、後半の第一奏楽「鳳凰吟」、
笛	濱元里之子	第二奏楽「慶皇都」にもそれぞれ上記と同
鼓 小銅鑼	登川里之子	様の楽器および演奏者名が記されている。
鼓 鍔子	宇地原里之子	奏楽ほか唱曲というのがあって、それは三
銅鑼 檀板	富永里之子	絃や琵琶、揺琴、胡弓などを使っていて、
韻鑼	小禄里之子	歌詞はすべて漢文である。明清楽を演奏していたと思われる。一曲だけ「琉歌」というの
挿板		があって三絃2挺を使い、歌詞は「キヨノホコラシヤ、ナヲニギヤナタテロ、ツボテオルハナノ、ツユキヤタゴトニ」と記されている。

明清楽を演奏していたとすれば、鼓は桴を使って打っており、写真(2)のような演奏風景であったと思われる。

(4) 徳川黎明会・徳川美術館所蔵の鼓

徳川美術館所蔵の楽器は、1798(寛政10)年に江戸の戸山の別邸で薩摩藩の士を楽士を中心として演奏が行われた際の楽器で、琉球使節より尾張徳川家に献ぜられたものであるという。それらの楽器のなかに鼓があり、次のように解説されている。

(註1)

(註2)

鼓——ともに(徳川美術館と水戸彰考館に所蔵されている鼓のこと一大城)全く同じ朱塗沈金七宝繫牡丹唐草模様の台が付属する。鼓の彩色もまた同じである。皮の周囲は金箔を貼り、中心部は黒漆塗りとし、両者共に透き漆を上からかけてある。ともに金箔白檀塗りの桴一対が添ってある。



写真(2) 「琉球人座楽並躍之図」(沖縄県立博物館所蔵)

鼓は両側に皮が張られている。

また、徳川美術館には「琉球楽器図巻」(享保3、1718年以前の成立か)があり、道楽(路次楽のことか)の楽器には鼓<クウ>が2対あって桴も描かれている。さらに、坐楽(御座楽のことか)にも鼓<クウ>があって、木のわくに設置されている。坐楽の演奏風景も描かれているが、桴を用いて打っている様子が伺える。

(註1)、(註2) 徳川義宣「琉球王府式楽とその楽器について」『沖縄の工芸』所収、昭和50年。

(5)『校注琉球戯曲集』(1929年)

同書に1838(尚育4)年の仲秋宴、重陽宴の御冠船踊の記録がおさめられている。仲秋宴に「入子」の芸能があって、鼓、太鼓と関わりがある。後述するが、現在でも民俗芸能に<道イリク>というのがあって、やはり太鼓の演技である。

カ)「入子躍」に鞆打と太鼓打が登場している。鞆(羯鼓)は、鼓の一種で、台の上にすえて桴を両手に持って打ち鳴らす。

キ)「道入子」には太鼓の大桴、小桴の打ち方、太鼓打人数のはやし声のタイミングなどを図示してある。さらに入子躍之時歌として(世なをりぶし)で2歌詞うたい、扇子をどりとある。

ク)「中イリコ」「長イリコ」「三ツ入子」があって、但道入子同断とある。

ケ)「道入子」がさらに2回演じられる。

以上は、二番のプログラムであるが、三番の扇子をどり(曲名は、こてぶし)に次のように記されている。

コ) 音取笛太鼓小鼓箏笙三味線小弓琴各一曲調部候間、拍子木打候得ば笛之席太鼓小鼓にて出、一並に立。

音取りの笛、太鼓、小鼓、箏、笙、三味線、小弓、琴がひととおり楽器の調子を検べ、調絃をする。そして、拍子木を打って、笛と太鼓に合わせて踊り手が登場するというも

のである。着付、歌詞をみると、現在演じている古典舞踊若衆踊の若衆こてい節と思われる。出羽を笛と太鼓の演奏にのせて登場するというのも現在の演じ方と同じである。

サ)「唐棒」に拍子木打候得者、太鼓どら拍子にて出る。

唐棒の演技の出羽は、太鼓とドラを打つ、ということである。

(6)『躍狂言并組躍番組』

石垣市字石垣の「躍番組」である。宮島御嶽において催された結願祭芸能のプログラムで、1895(明治28)年の記録。

シ) 鼓打躍

一 女四人	西大やまふさ	同やまいつ	女4人で鼓打躍を躍ったというだ
	仲大浜やめいた	同やまんだら	けの記録と、衣裳のことを若干記し
	但白地衤衣	赤首調	てある。白地衣を着ていたとすれば、
			女踊りであったかも知れない。

以上みてきた文献の<鼓><太鼓>は、打楽器としての記録であった。次に、歌謡にうたわれた<鼓><太鼓>を検討してみたい。

[二]

歌謡に<鼓>や<太鼓>のことがうたわれているもののうち、はじめに『おもろさうし』から検討してみよう。

(7)『おもろさうし』(1531~1623)

『おもろさうし』には、鼓のことは<つゝみ>あるいは<つゞみ>とあり、その語にたとえば<つゝみのあぢ>という具合に、鼓を称えた表現がある。鼓をよんだオモロは、重複をのぞいて10数首ある。

ス) 巻2-11 あおりやへかふし

一 中くすく あつる	中城にある
うらとよむ つゝみ	浦々まで鳴響む鼓
うちちへ なりあからせ	(鼓を) 打って鳴り揚がらせよ
又 とよむくにあつる	鳴響む国にある

島々浦々にまで響きわたる名高い鼓、それを打ち鳴らすことによって、土地の霊力を高め、繁栄を願うというものである。呪的な予祝の発想が伺える。

セ) 巻19-15 うらおそいのおやのろかふし

一 さしき よりやげの もりに	佐敷寄り上げの杜(原注一千瀬崎)に
しまよせる つゞみの あるあぢ	島の人々を寄せる力をもっている鼓を

所有している按司

又 ね国 よりやげの もりに

根国寄り上げの杜に

「しまよせる」は鼓の美称である。佐敷の寄り上げの杜に、島の人々を寄せる（世の中を治める）力をもっている鼓を所有している按司がいるというのである。

これらと類似した表現に「うらのなりとよみ」（巻13-225）——島々浦々みまで鳴り響く鼓、「しまなめるし」（巻16-42）——島を鎮める呪力をもった鼓、「くにとよみ」（巻19-44）——国中に鳴り轟く鼓、という意味である。いずれも、鼓の霊力により国（領地）の生命力を高めて繁栄をもたらし、領地を治めるという趣旨である。

ソ) 巻12-18 あふりやへかふし

一 あめくにやか おもろ

天久仁屋（オモロ歌人）のおもろ

けらへ あや つゝみ

立派な美しい鼓

うちちへ なりあからせ

（鼓を）打って鳴り揚がらせよ

又 あめくしか せるむ

天久子（オモロ歌人）のおもろ

神遊びにすばらしい鼓を打ち鳴らし、繁栄を予祝するというものである。

タ) 巻2-41 うらおそいふし

一 こゑく 世のぬしの

越来世の主の

つゝみの あぢなりかなし

鼓の按司鳴り加那志（を打って）

ふうくに うちよせれ

果報な国を打ち寄せよ

又 あかる世のぬしの

揚がる世の主の

「あぢなりかなし（按司鳴り加那志）」は、鼓の美称である。霊力ゆたかな鼓によって果報な国が打ち寄せられるという内容である。

チ) 巻12-26 たいらのとのゝふし

一 きこゑきみ とよみ

名高い聞ゑ君鳴響み<神女名>

せだかきみ とよみ

霊力豊かな精高君鳴響み<神女名>

うちちへ みものきみ

（鼓を）打って 君見物<神女名>

又 きたたんの みやに

北谷の神祭りの庭に

あがなさの みやに

吾が成さ（領主）の神祭りの庭に

又 たまよせか まへに

霊寄せ（建物名）の前に

よりたちか まへに

寄り立ち（建物名）の前に

又 もゝくちの つゝみ

たくさんの鼓

八そくちの なりよぶ

たくさんの鼓

なりよぶ（鳴り呼ぶ）は鼓の美称（巻2-71、巻15-53）。「なりきよら（鳴り美ら）」（巻1-37、巻10-3、巻13-82）、「なりとよみ（鳴り響み）」（巻1-37）、「なよす」（巻

7-47) も鼓の美称。

北谷の神祭りの庭に、領主の神祭りの庭に、霊寄せ・寄り立ち（穀物の倉のことか）の前に、たくさんの鼓を打って村の繁栄を予祝するのは実にみごとである、という内容である。百口・八十口（たくさん、数多く）の鼓を打ち鳴らすところにより一層、鼓の霊力を鼓舞するものと考えられる。

以上、オモロの例をいくつかみてきたが、オモロでは、鼓は霊力を有するもの、それを打ち鳴らすことで人びとや領地の生命力をたかめ、繁栄をもたらすもの、予祝するものとして詠まれている。鼓はきわめて呪的な楽器として位置づけられているのである。

（8）『かでいかりぬ うやぬにーり』

多良間島で旧暦5月に行われる祭り<スツウブナカ>でうたわれる神歌である。

嘉手苅の親が立派な家を建てた。新築祝いをしようとしたが、鼓の木がなくて鼓が造れない、伊良部島の友達をたよって鼓の木を求めに行く。友達は植えてある木をまるごと差しあげた。その木を切り倒して船に乗せて多良間島に持ち帰った。鼓の型を造って牛の皮を被せて、縄を掛けて締め、打つと島中に鳴り轟いた。その鼓に合わせて坐ってニーリ°を歌い、立ってニーリ°をうたうと神の上に届いた。その美しさよ、清らかさよ、という内容である。後半部分の歌詞を引用してみたい。

61、かでいかりぬ^(註3) ちいじいん

シュラ マジャリ° ウヤヨ

62、ういうきぬ むり°ん

63、ゆぬぶやば ぎゅらい

64、みゆぶやば ぎゅらい

65、ふきいぎゅらい からや

66、ちいふぎゅらい からや

67、ゆぬぶやぬ ゆわいぬ

68、みぬぶやぬ しゅぎいぬ

69、ちいぢいむ°ぎぬ ちまり

70、なるきぎぬ ちまり

71、ちいぢいむ°ぎぬ ちいめん

72、なるきぎぬ ちいめん

73、いらうたびい しいたり°

74、ぱなりたびい しいたり°

75、あんやちか うやよ

76、うりやちか しゅやよ

嘉手苅の頂に

（囃子、以下省略）

ウイウキの森に

大きな家を造って

立派な家を造って

葺き建ててからは

造り建ててからは

大きな家の新築祝いのための

立派な家の祝儀のための

鼓の木が足りなくて

鳴る木が足りなくて

鼓の木の故に

鳴る木の故に

伊良部島へ旅をしてきました

離れ島へ旅をしてきました

そうであるならば親よ

そうであるならば主よ

- 77、いびなぎな うしゃぎ
- 78、むとうなぎな じゃうやしゅ
- 79、あまり ぶからしゃん
- 80、どうきいぬ いしやうしゃん
- 81、きびがしいた むめい
- 82、きびや きりたうし
- 83、ゆだや うちあやし
- 84、いちいきいしゅり° きいしゅり
- 85、ななきいしゅり° きいしゅり
- 86、だきやばま むちゆるし
- 87、かむ°がびいだ むちゆるし
- 88、ふにがまん ぬゆし
- 89、びやしゃきいん ちいまぎ
- 90、たらまじいま むめい
- 91、みいばらじいま むめい
- 92、む°がやばま むちゆるし
- 93、かむ°がびいだ むちゆるし
- 94、うまからぬ むちゃぎ
- 95、かでいかり°ん むちゃぎ
- 96、ういうきん むちゃぎ
- 97、ちいぢいむ°かた ちいふり
- 98、なるきかた ちいふり
- 99、うしいぬが うしいかぶし
- 100、うやがばに かぶし
- 101、なや かきていしみてい
- 102、うていば しいまうしゅい
- 103、うていば ふむ°うしゅい
- 104、なうていがし なやきでい
- 105、いけていがし なやきでい
- 106、しいまうしゃき なやきでい
- 107、ふむ°うしゃき なやきでい
- 108、びゆてい にり°にらぎ
- 109、たちいてい にり°にらぎ

植えてあるまると差しあげましょう
 根っこからすべて差しあげましょう
 あまりに嬉しくて
 とても嬉しくて
 その木の下にいらしゃって
 木を切り倒して
 枝をうち払って
 五切りに切って
 七切りに切って
 ダキヤ浜に持ち降ろして
 神の浜に持ち降ろして
 船に乗せて
 早先に積みあげて
 多良間島にいらっしゃって
 三原島にいらっしゃって
 ソガヤ浜に持ち降ろして
 神の浜に持ち降ろして
 そこからの持ちあげは
 嘉手刈に持ちあげて
 ウイウキに持ちあげて
 鼓の型を造り
 鳴る木の型を造り
 牛の皮をかぶせて
 覆い物を被せて
 縄を掛けて締めて
 打つと島中に轟き
 打つと国中に轟き
 どういうふうに名が轟いたか
 いかなるふうに名が轟いたか
 島中に響くように名が轟いた
 国中に響くように名が轟いた
 坐ってニリ°をねりあげた
 立ってニリ°をねりあげた

- | | |
|---------------------------------|------------|
| 110、いちいくいどう かむ ^ろ がうえ | 五声こそ神の上 |
| 111、ななくいどう しじいがうえ | 七声こそ靈魂の上 |
| 112、かむ ^ろ がうえぬ かぎしゃ | 神の上の美しさよ |
| 113、しじいがうえぬ かぎしゃ | 靈魂の上の清らかさよ |

新室を寿ぎ、富貴や家の繁盛をもたらすために、靈力ゆたかな鼓を造って打ち鳴らすという。ここでも鼓が靈力をもつ呪具としてうたいあげられているのである。また、木を切り倒して、適当な大きさに切り、鼓の型を造って牛の皮を被せ、縄を掛けて締めるという具合に、鼓の製作過程を具体的に歌っている。その点はオモロの鼓のうたわれ方とちがっている。

(註3)『沖縄の神歌』沖縄の神歌伝承活動(I)―宮古諸島―、沖縄県教育委員会・1988年。歌詞の引用も同書による(表記を若干変えた)。

(8)『かந்தゆどうんた』

与那国島の古謡である。〈かந்தゆ〉は〈神の世〉、〈どうんた〉は〈ゆんた〉の意。まず、歌詞を紹介してみる。

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1、んかちどうち | 昔年の |
| かந்தゆぬ まにどうす | 神の世の真似をする |
| 2、うやぎどうち | 富貴な年に |
| かந்தどうち なりょーりば | 神の世になっているので |
| 3、しとうむていら | 早朝に |
| あさばんでいに うきて | 未明に起きて |
| 4、ばがさしぐん | 我が刀を |
| ばがていぬぶん とうりやむてい | 我が手斧を取り持ち |
| 5、ばがちでいん | 我が鼓も |
| くりないむぬん みぬたば | この鳴り物もなかったから |
| 6、まいぬだまに | 前の山に |
| うりとうむり はいりてい | それを探しに入り |
| 7、ちまさぐり | 横に探り |
| なぎさぐり みりばどう | 縦に探してみると |
| 8、なちむしき | 夏6月 |
| んににすみ ねぬたば | 気に入るものがなかったから |
| 9、どうぬふさみ | 同じ跡を踏み |
| ふみやかいし やむどうり | 踏み返し家に戻り |
| 10、どうぐていすば | 門の側に |

- とうんでいゆむたる はぬていき
- 11、まむていかんだ
ぐしくかんだ はゆたば
- 12、ぐしくかんだ
まむていかんだ とうりやはんし
- 13、いつかいし
ななきり きりうとうし
- 14、さいぐひとうば
しぐひとうば たるみょーり
- 15、うちぬかば
んまぬかば ゆしきょーり
- 16、ばがないむぬ
くりないむぬ ぱりていどう
- 17、ひとつむとうにや
あんとうりまでいん ちかりょーり
- 18、ふたむとうにや
いりむていにん ちかりょーり
- 19、みむとううていば ていんまでい
ちかりょーたる はがちでいん
- 20、ばがないかにん
くりないかにん ゆぬすぶさ

とび出て生えた桑の木
マムテ蔓が
石垣蔓が生えているので
石垣蔓を
マムティ蔓をとりはずし
五かえしに
七切りに切りおとし
細工人を
大工を頼み
牛の皮を
馬の皮を寄せて来て
我が鳴り物を
この鳴り物を張ってから
ひと打ちには
網取<地名>まで聞こえ
ふた打ちには
西表<地名>まで聞こえ
み打ちには天まで
聞こえた我が鼓
我が鳴る鐘も
この鳴る鐘も同じ勝負である

この古謡も<かでいかり°ぬ うやぬにーり°>同様、鼓の製作過程を歌い、さらに鼓の霊力についてうたっている。製作過程は、細工人や大工を頼んだりするあたりは、<かでいかり°ぬ うやぬにーり°>よりも具体的になっている。

一打ちで網取まで、二打ちで西表まで、三打ちで天まで鳴り響くというのは、単に音響的によく鳴るということではない。鼓の霊力によってそれらの土地の生命力を高め、繁栄を願うという意を含んでいる。

<オモロ><かでいかり°ぬ うやぬにーり°><かんだゆどうんた>にうたわれた鼓は、単なる打楽器ではなく、霊力を持つきわめて神聖な呪具としての機能をもっていることが、構造的にわかった。

[三]

太鼓の芸能について、現在演じられているもののなかからいくつかを紹介してみたい。

(9) 舞踊地謡・合奏

古典芸能の場合、地謡の楽器は三線、琴、胡弓、笛、太鼓を用いることが多い。そのときの太鼓は大太鼓（宮太鼓。長胴太鼓）と小太鼓（締太鼓。和太鼓）を使用する。大太鼓は、基本的には強声部に打って楽曲にリズムと速度を与え、小太鼓は弱声部に打って大太鼓を助け、リズムに修飾を与える。合奏の場合も上記の楽器を使用するが、地謡、合奏いずれのときも幕開けに、太鼓のみで＜音取り（ニートゥイ）＞を演じることがある。

古典女踊の地謡では太鼓を用いらないが、老人踊、若衆踊、二歳踊、雑踊には太鼓を用いる。あくまでもリズムを刻むのに用いられるので、テンポのおそい音曲には太鼓は登場しない。

演劇（組踊、芝居、狂言）では、効果をあげるために太鼓を使用する機会が多い。芝居では、演技開始の前に、＜呼び太鼓＞といって、観客動員のための太鼓打ちがある。

(10) エイサー

エイサーは盆踊である。沖縄本島中・南部地方では、大太鼓と締太鼓を打ち、踊り手がつく。30～50人の青年たちによって演じられる。大太鼓が先頭になり、締太鼓がそれに続き、さらに踊り手が続くが、大太鼓よりも締太鼓の方が人数が多い。いずれも桴を用いて打つ。勝連半島で演じられるエイサーには、パーランクーといって片面張りの太鼓を使い、桴は大太鼓や締太鼓で用いられるものよりも細い。

(11) ウスデーク

沖縄本島及び周辺離島で演じられている婦女子による輪踊りである。旧暦7月の盆前後に行われる行事＜シメグ＞で踊られる。方言でチデンと称する太鼓（平太鼓）を先頭の数人の婦人が打ち、以下、踊り手が20～50人程続く。桴の先に布を巻いて用いる場合が多い。チデン打ちは音頭取りでもある。

(12) 道イリク

嘉手納町字野里で継承されている芸能である。ショーク（鉦）打ち2人が先頭になり、後に太鼓（締太鼓）打ち9人が三列縦隊で並んで、打ち鳴らしながら歩く。現在、舞台芸能として定着しているが、本来、道ジュネー（お練り）の芸能である。野里の旧暦8月の村踊りでは、芸能公演の幕開けと最後にこの道イリクを演じている。

(13) 屋良のチンク

嘉手納町字屋良に伝承されている芸能である。チンクは鉦のこと。道ジュネーの芸能である。チンク2人と太鼓（締太鼓）40～50人で行列をつくり、勇壮に演じる。

(14) 京太郎

沖縄市字泡瀬と宜野座村字宜野座で演じられている門付芸系統の芸能である。三線（早口説）と太鼓のリズムに合わせて馬舞者や踊り手が登場し、隊列をつくって演技をする。

扇子の舞（京の下り）、御知行（升斗舞）、鳥刺舞などを踊った後、馬舞者の口上になるが、出羽以外の演技はすべて太鼓でリードしていく。

（15）打花鼓

中城村字伊集に伝承されている芸能。中国の影響を受けた芸能で、打楽器を打ち鳴らし、三線に合わせて踊る。服装も中国風である。11人で演じるが、楽器を担当するのは、ドラ1人、ガク2人、ハーチンガニ1人、太鼓1人、ブイ1人。三線の打花鼓の歌が始まると下手から登場する。舞台を一巡して後、ブイ打ち、ハーチンガニ打ち、太鼓打ちがそれぞれの楽器を打ち鳴らしながら踊る。踊るのはこの3人だけである。

（16）大胴小胴

石垣市登野城に伝承されている芸能。太鼓（大胴）と小鼓（小胴）、締太鼓を組み合わせた能楽系の芸能で、早舞の曲が演奏される。琉球王朝時代、石垣市四箇村（登野城、大川、石垣、新川）の士族は謡曲や能楽の囃子をたしなんでいた。そのときに習得して、現在に伝えられている。

（17）タイラク

八重山郡黒島に継承されている芸能。笛のリードでパーランクーを持った青年男子10数人で演じる。シュロ毛でつくった鬘にかんざしをさし、つくり鬘を付けて着物の右肩ぬぎ、腰に煙草入れをさす。二列に並び、左手に鼓を持ち、右手に持つ桴で打ち「ハイヤーサッサ」と声をかけながら踊る。

（18）タイコマー

八重山郡鳩間島で伝承されている芸能。旧暦6月に行われる豊年祭に演じられる。数人二列縦隊になった青年男子が笛のリードによって、「ヒヤーユイ」という掛け声をかけながら演技をする。二列の間に長刀を持った者が1人いて、太鼓を打っている間、長刀の芸を演じる。東村と西村でそれぞれが演技の型がある。平太鼓を使う。

（19）太鼓踊

先のタイコマーも含めて、八重山全域で太鼓踊りが伝承されている。石垣市登野城では、旧暦6月の豊年祭で少年男子（若衆）によって演じられるが、鉦2人と締太鼓10数人を使用する。竹富島の太鼓踊りは、旧暦10月の種子取祭で庭の芸能のひとつとして演じられている。鉦2人、締太鼓10数人。現在、中学生から老人までの男子で構成されている。石垣市平得の太鼓踊はイリク太鼓といわれ、旧暦6月の豊年祭と種子取祭（新暦1月15日）に演じられる。同市大浜の豊年祭（旧暦6月）でもイクリ太鼓が演じられる。登野城や竹富島同様に、鉦と太鼓で構成され、人数もほぼ同じ。中学生男子が演じる。石垣市川平の太鼓踊は、結願祭（旧暦8月）に青年男子2人1組で数組出演し、笛のリードで踊る。

(20) シヌン

八重山郡与那国島で太鼓及び太鼓の芸能を<シヌン>とっている。シヌンは与那国島で製作される。牛の皮を両側に張ったものである。与那国島で、シティ（節祭）やシティガン（結願祭）のときの舞台芸能で、最初に演じられる。シヌン数人、ドラ1人、笛1人が舞台奥に並び、笛のリードで掛け声をかけながら勇壮にシヌンを打つ。シヌンは左わきにかかえ、右手に桴を持って打つ。シヌンを打つことによって舞台を祓い清めるのだという。棒踊のときも同じメンバーで囃す。また、庭で旗頭を立てる際にも同じメンバーで囃しているが、それは<ガッサイ>と称する。

以上、いくつか太鼓の芸能をみてきたが、他にも太鼓を芸能に用いているのがある。古く、琉球王府の公式儀礼に演奏された<御座楽>や道行芸の<路次楽>にも太鼓が用いられていた。ハーリー（船漕ぎ）や綱引きのガーエー（囃し。氣勢をあげる意）にも太鼓がにぎやかに打ち鳴らされる。祭りでは、先に紹介したウスデーク以外にも神歌を歌う際に鼓を打つことがある（例一國頭村比地のウンジャミ、那覇市識名の三月遊び、竹富島の種子取祭、鳩間島の豊年祭）。棒踊や獅子舞の囃しにも太鼓が打たれる。上野村字野原で催される祓いの行事<サティパロウ>で、パーントゥが集落内を練り歩く際にホラ貝などといっしょに太鼓が使われる。

このように、<鼓><太鼓>は祭りや行事にはもっともよく使用されており、欠くことのできない重要な楽器であることがわかる。

[四]

本土の文芸における<鼓><太鼓>の用例をいくつかみてみよう。

(21) 歌謡

「古事記」中巻に皇太子（応神天皇）のため母親の息長帯日売命が待酒（祭祀用神酒）をつくられたとき、建内宿禰が讃美して皇太子のために答えてよんだ歌。

この神酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて

歌ひつつ 醸みけれかも 舞ひつつ醸みけれかも

この御酒の 御酒の あやに 轉樂し ささ

鼓を臼の側に立てて、その鼓の音に合わせて歌い踊るのである。歌い舞うその勢いによって御酒の醸酵をうながすというのである。

「万葉集」にも<鼓>をよんだ歌がある。

卷2-198 高市皇子尊の死をいたんで柿本朝臣人麻呂が作った歌（皇子尊が少年の頃、壬申の乱の時の活躍をよんだくだり）。

「かけまくも ゆゆしきかも…… 斉ふ鼓の音は 雷の声を聞くまで……」
(＜兵士を＞お励ましになり、＜隊伍を＞整える鼓の音は雷の音かと聞こえるほどで、……)

卷 11-2641 「時宋の打ち鳴す 鼓数み見れば 時にはなりぬ 会はなくも怪し」

(時宋＜時を知らせる役人＞が打ち鳴らす鼓の数を数えてみると、会うべき時刻になった。それなのに会わないのはおかしいことだ。)

万葉集の例では、戦闘を鼓舞するために鼓を打ち鳴らしたり、時を知らせるために鼓を打ち鳴らすというものである。

(22) 太鼓の芸能

本土の芸能で太鼓が用いられるのは、雅楽や能楽をはじめ、民俗芸能では太鼓踊、雨乞い、田遊などで見ることができる。

ア) 雅楽 —— 雅楽は宮廷音楽として輸入され、奈良時代までは雅楽寮に属する専門の音楽家によって演奏されたが、平安時代になると職業音楽家のほかに、公卿などのなかにも雅楽の奏者がたくさんあらわれ、寺社でも演奏されるようになり、雅楽は国の儀式のための音楽から、個人の教養や趣味の音楽に変わっていった。

雅楽は普通三種に大別される。第一は、古代の朝鮮、中国などから渡来した楽舞(唐楽と高麗楽)。第二は、外国渡来の楽器を用いて、伴奏する新様式の声楽曲で、催馬楽や朗詠など。第三は、わが国の古楽に由来するもので、神楽、東遊、久米舞など。第一と第二は、外国音楽とその影響を受けたものである。

雅楽の楽器は管楽器、弦楽器、打楽器の三種に分けられる。①管楽器……笙、篳篥、龍笛、横笛、高麗(狛)笛、神楽笛、太笛(大和笛)。②弦楽器……琵琶、箏、和琴(大和琴)。③打楽器……羯(鞞)鼓、太鼓、鉦鼓、三鼓、老鼓、笏拍子。

羯鼓は両手に1本ずつ桴を持ち、両面を打つことが多いが、片面だけを打つこともあるという。太鼓には大太鼓と荷い太鼓があって、大まかなリズムを強調し、右手の桴は強く、他の桴は弱く打つのが原則という。三鼓は高麗楽に限って使う楽器で、桴は右手にひとつだけ持って右の皮面だけを打つ。

イ) 能楽 —— 能楽や狂言において、謡と舞の伴奏をつとめたり、人物の登場、退場のおりに用いられるのを囃子という。囃子には能管、小鼓、大鼓、太鼓(あわせて四拍子という)の4種、または太鼓を除いた三種の楽器を用いる。これらの楽器を担当する演奏者のことを囃子方という。

ウ) 歌舞伎 —— 歌舞伎音楽の一種＜下座音楽＞では、三味線、笛、小鼓、大鼓、太鼓のほか、胡弓、銅羅、本釣鏡、摺鉦、双盤、拍子木、四つ竹など多くの楽器が使用されている。

エ) 太鼓踊 —— 太鼓踊は太鼓を打ち鳴らしながら踊る芸能で、全国的に様々な形式

を持ったものが分布している。風流獅子舞、羯鼓踊、かんこ踊、ザンザカ踊、臼太鼓踊、楽打ち、浮立などの名称で呼ばれている。太鼓あるいは羯鼓を踊り手が腰につけて踊る形、横に倒して置いて両面を叩く形、普通に縦に置いて叩く形などがある。

太鼓の音が雷鳴を連想させるところから、雨を降らせるための雨乞踊として機能させるところもある（類感呪術）。盆踊りにも太鼓踊を踊る。災厄や疫病の流行を除く目的で太鼓踊を踊るところもある。

また、大太鼓を苗代田にみたてて、ここに種子を蒔いたり、その周辺で芸能が行われたりする。相撲に太鼓が使われるのも、相撲の芸能的要素を残すひとつの証拠である。

民謡の囃子、万歳、大道芸などの囃子にも使われている。

[五]

以上、＜鼓＞＜太鼓＞について、古文献と芸能の事例をとおしてみた。その結果、①鼓や太鼓は、リズムを刻む楽器であること。②鼓や太鼓は、芸能の囃子に欠くことのできぬ楽器であること。③オモロや神歌、日本古代歌謡では鼓や太鼓は、霊力を持っている呪具としてうたわれている、ということがわかった。

＜つづみ＞のツツは、霊力・靈魂がその中空部分に宿り込むとしている筒の信仰に関係があろう。古くは害虫や悪霊や敵を威嚇し、これをさけるために、あるいは精霊を活発にするための囃子としても用いられた。『古事記』『日本書記』の＜天の岩屋戸＞説話をみてみよう。

『古事記』上巻によれば、高天原を統治する天照大御神が弟須佐之男命の乱暴を怒って、天の岩屋戸に身を隠してしまわれたとき、諸神集まって岩屋戸の前で祭祀を催した。その折、天宇受売命が天の香具山から採ったヒカゲノ蔓をタスキにかけ、さらにマサキノ蔓を鬘にして、小竹葉（笹）を持ってウケ（汗気）を覆せて、その上にのぼり、踏みとどろかして神がかりになった。そのさまは、胸乳もあらわに、裳緒もホトにおし垂れて、あられもない演技であった。それがおもしろくて、見物の神々がどっと笑ったという。

ここでいう＜ウケ＞はヲケ、オホケと同義語で、空筒、槽を意味する。書紀には＜覆槽＞をウケと注記しているし、『延喜式』鎮魂祭の大直神一座のなかに＜宇気槽一隻＞とあり、この鎮魂祭には猿女が参加して＜御巫及猿女等依例舞＞とある。そのウケを音をたてて踏みとどろかしたというから、ウケは太鼓の原始形態といえるのではあるまいか。踏みとどろかすことにより、ウケの中にこもっている神霊を外へ誘い出し、それを天宇受売命かわが身に依り憑かせ神がかりになる（憑霊現象）。そして、その依り憑いた魂を岩屋戸の中に隠れておられる天照大御神に献じて、復活させるというのがこの祭祀の目的であ

った。神事に太鼓は欠かせない楽器であったのである。

また、ウケの上にのぼったというのは、そこは台であり、そこで足拍子を踏みとどろかしたというから、これは<舞台>というべきものである。芸能史的にみると、ウケは舞台の発生とも深く関っているのである。

鳩間島の旧暦9~10月の行事シチ<節。節替り。年の折目>の晩に、村の井戸（掘り井戸）の近くでオケ（桶。方言：ウーキ）を頭からすっぽり被り、しゃがんでいと祖霊の話し声が聞こえるといわれている。オケの中は、まさに聖なる空間である。

文字をもたない社会では、太鼓によるメッセージの伝達方法<太鼓ことば>があり、人間のことばと基本的な概念の上で同一視されている。

このように、<鼓><太鼓>は実にバラエティーに機能している。今後、<鼓><太鼓>について①材質、皮の種類、形状、桴などの分類。②太鼓の持ち方、打ち方の分類。③打つ目的は何なのか。④太鼓の芸能の分類などを詳細に調査・研究することが必要である。本稿を<序>としたゆえんである。

参 考 文 献

嘉味田宗栄著 「鼓の『はやし』」『琉球文学発想論』所収 1968年

池宮正治著 「おもろの『鼓』」『沖縄芸能文学論』所収 1982年

『日本庶民生活史料集成』第二十七巻 三国交流誌 1981年

沖縄県立図書館所蔵 『琉球聘使略記』

『伊波普猷全集 第3巻』 1974年

京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』 1975年

石垣市立八重山博物館所蔵 「躍狂言并組躍番組」（写本）

仲原善忠・外間守善編 『校本おもろさうし』 1965年

仲原善忠・外間守善編 『おもろさうし辞典・総索引』 1967年

外間守善・西郷信綱校注 『おもろさうし』 1972年

『古事記 祝詞』（日本古典文学大系1） 1972年

『日本書紀』（日本古典文学大系67） 1973年

国立劇場編 『日本の伝統芸能』 1973年

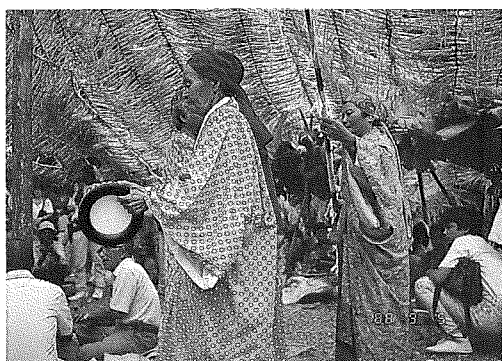
三隅治雄著 『祭りと神々の世界』 1979年

仲井幸二郎・西角井正大・三隅治雄編 『民俗芸能辞典』 1983年

武満 徹・川田順造著 『音・ことば・人間』 1983年



＜比地のウンジャミ＞
で鼓を打ちながら神
歌を歌う神女たち。



＜塩屋のウンジャミ＞屋古の神アシャギ
で鼓を打つ神女。



＜久高島のイザイホー＞で鼓を打つ
神女



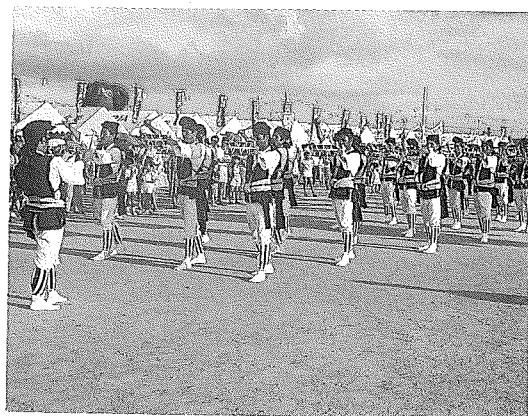
＜塩屋のウンジャミ＞ハーリーの衣裳や
ガーエーの鼓の点検をする田港の婦人たち



＜ンヌン＞与那国島の芸能公演開幕の太鼓の演技



沖縄市の＜エイサー＞



嘉手納町＜屋良のチンク＞



石垣市登野城の豊年祭で演じられる＜太鼓踊＞



竹富島の種子取祭で演じられる＜太鼓踊＞